127 渡嘉敷ペークー（八）

（王様と碁・米俵・着物）

頓知のある方で、まあ、一休和尚みたような、頓知のある人で、非常に。渡嘉敷ペークーというのは。

この人はですね、囲碁が非常にうまかったらしいですよ。王様がこの方を呼んで、囲碁の相手をやっておるらしいですよ。で、囲碁の場合は、同じ同等の人間になってですね、

「えいやっ」とこう、声を掛けてやるわけ。それを家臣が聞いてですね、

「ペークー、あなたはね、君はね、王様に対してね、あなたと王様とは天と地の開きがあるのに、王様に対して同等の人間の扱いをしてやっておる。そんな馬鹿なことしたら貴様許さんぞ」と、側近が言うておるわけです。だから渡嘉敷ペークーは、翌日からはですね、王様のところに、庭に座ってですね、王様呼んでも中に入らないわけです。

「囲碁早く始めて下さい」と。で、一玉置いてですね、また庭に下がって行く。こうやっておるわけです。また打って、また下がる。そしたら王様、面白くないものだから、

「どうして君、ペークー、どういう意味か」。ペークーに言うたらしい。

「実は私、命が危ないから、こういうふうにしております」と。

「なぜ、私と碁を打てば貴様の命がどうして危ないか」と。

「いや、王様はいいけれども、家臣が私のことを無礼者といって殺そうとしてますので、そんなことやっておるわけです」。

「碁というものはね、同等の立場になってやらなければ、何にも面白くない。貴様許さない」と。王様にやられたですよ。叱られて。

それから、ペークーは座敷に上がって、やったそうですよ。その点は頓知があるわけですね。

それから、ペークーに対して、

「君は米一俵やるから」。それで、米一俵やるということで相談してあるもんだから、馬には鞍というものが

あるんですよ。鞍。馬の背中に付ける物。この、馬に鞍をあれしてですね、王様のところに行っとるらしい。そしたら、一俵を出してきてですね、部下に言い付けて、一俵出してきて、

「ペークー、米を出してきてあるからね、持って帰りなさい」と。そしたら、このペークーはですね、一方に乗せておるわけですよ。馬の鞍はもうひっくり返ってですね、一日中もう、ひっくり返るわけですよ。こっちに乗せたらこっちがひっくり返る、向こうに乗せたら、また向こうにひっくり返る。そしたら、

「王様、これどうしても運ぶことができません。もうひっくり返りますから。もう絶対落ちるから、もう一俵出して下さい」と。もう一俵貰うために。二俵貰って。

「ああ、今なら大丈夫です。ありがとうございました」とか言ったらしいですよ、ペークーは。それで有名ですよ、このペークーというのは。

またもう一つはですね、王様からこの、着物を貰ったらしいですよ。着物を。着物を貰ってですね。王様が着けた着物を貰っとるもんだから。

「正月に、元旦の日に着けなさい」と貰ったらしい。そしたら、このペークーはですね、盛んに泣いておるらしいですよ、奥で。もうもう、わあわあ泣き出してですね、もう非常に泣き出しておるらしいですよ。そしたら、王様は、

「おいペークー、君はね、私が着物を着けさせたらね、くれたらどうして泣くか。着物、面白がってするのが当然でないか」と。そしたら、

「いや、王様、私はいいけれども、私が王様からこれ貰って立派な着物を着けますが、うちの母は一枚しかありません。はい、着物一枚、冬にも夏にもこの一枚で過ごしております。それで、うちのお母さんは、私はこんなきれいな着物を着けて正月はできるのに、うちのお母さんは着物、いつでも冬も夏も一枚で過ごしておるのに、それ悲しくてもうたまりません」と、そしてまた泣いたらしいですよ。

この王様は、奥さんのことをウナザラといいます、ウナザラ。ウナザラを呼んでですね、

「これ来なさい。ペークーに君の着物、やりなさい」と言うて。母の分も貰うてですね、帰ったらしいです

よ。

非常に頓知のある方です。

字武富　長嶺和男